

# 周氏兄弟における「江戸」と「東京」

——明治末期の日本文化体験——

小川利康

## 【中文摘要】

周氏兄弟留日体验有很多共同点，但仔细比较发现他们在东京体验的文化内涵有很多差异。要了解兄弟间的差异，须以“下町”与“山手”这两个概念来分析东京文化体验。“下町”是代表江户时代的商人文化，它主要分布在“隅田川”一带地区。它发展了如浮世绘，落语等娱乐性极强的文艺。“山手”是代表武士（士族）文化。它重视儒教道德，偏于禁欲主义。明治维新之后，江户改为东京，士族没落，山手”文化被西方文化取代了。但“下町”文化还保留下来，一直到被关东大地震所烧毁为止。周氏兄弟主要在“山手”生活，吸收了西洋文化。但留日后期与日本妻子结婚的周作人还接受了“下町”文化，对永井荷风表示强烈的共鸣。从此可以看出兄弟之间的差异。

关键词：鲁迅；周作人；江户；下町；山手；赛登斯德卡；永井荷风；

## 1. 「江戸」から「東京」へ

現在の東京がその名を正式に定められたのは1868年7月17日だった。明治天皇は詔書で次のように宣下している。

朕今萬機ヲ親裁シ億兆ヲ綏撫ス。江戸ハ東國第一大鎮四方輻輳ノ地宜シク親臨以テ其政ヲ視ルヘシ。因テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン。是朕ノ海

内一家東西同視スル所以ナリ。衆庶此意ヲ體セヨ<sup>(1)</sup>。(『明治天皇紀』第一卷、句点は筆者による)

明治天皇はこの詔書で京都から江戸へ居を移して親政を行うことを宣言し、徳川幕府統治下の「江戸」は「東京」へと正式に改名され、ここに「東京」という都市が誕生する。とはいえ、徳川幕府が二百六十余年にわたり営々と築き上げた旧習が一夜にして改まるはずもなく、「東京」は江戸文化の土台のうえに生まれ、西洋開化の洗礼を受けつつ、徐々に東西の文化複合体たる都市へと発展していったのであり、明治期は変貌を遂げる過渡期にあったといえる。周樹人（魯迅）と周作人、この周氏兄弟は明治35（1902）年、39（1906）年にそれぞれ来日し、明治42年、44年まで日本で青年期を過ごしている。

和歌森太郎によれば「明治後期は、東京における住民の立場からいえば、市部にあつては江戸っ子の影が薄らぎ、『東京人』が形成されていった時期である。そして周辺の郡部が東京にひきつけられ、東京化を進めだした時期」<sup>(2)</sup>である。いわゆる「江戸っ子」気質を定義するのは容易ではないが、江戸時代に繁栄を極めた町民文化の産物であることに異論はないだろう。そして、明治維新以降の急速な西洋化は、江戸時代の町民文化が消えて行くプロセスでもあった。明治後期はその過渡期の掉尾にあたる時期であり、周氏兄弟は期せずして江戸が消滅する過程を体験したことになる。

この「江戸っ子」たる町人たちの居住区を「下町」と呼び、これと対置されたのが武士や僧侶の居住区「山手」である。著名な日本文学者エドワード・サイデンステッカー（Edward George Seidensticker, 1921年－2007年）は、『東京下町山の手 1867－1923』で、「江戸」の面影を色濃く残す「下町」が文明開化のなかで徐々に姿を消し、ついには関東大震災で灰燼に帰すまでの歴史を描き出している。著者は冒頭で「下町」を定義するにあたり、「下町」はある種文化性を表現する抽象概念で、明瞭な境界で仕切られた地域概念ではないと断

りつつも、江戸城の東側の隅田川、旧利根川の河口を埋め立てた地域が本来の「下町」であり、現在の地名でいえば、日本橋、京橋が「下町」に相当し、これに神田、下谷の低地部が含まれると述べ、いずれも埋立地であると述べている<sup>(3)</sup>。文政元年に作成され、江戸の「御府内」の範囲を裁定した「江戸朱印図」によれば<sup>(4)</sup>、隅田川以東の深川一帯も含み、より広い範囲を包摂しているが、著者の認識の方が実態に近かっただろう。いずれにせよ現在の東京より遥かに狭い江戸のなかでも、わずかな一角を占めるに過ぎない埋立地の「下町」が江戸文化を育てる揺籃となった。だが、その狭い下町に住まう人口は決して少なくなかった。著者はいう。

十八世紀から十九世紀にかけて、江戸はおそらく世界最大の都会だった。人口は百万を越え、時には百二十万ないし百三十万に達したものと思われる。当時ヨーロッパ最大の都市だったロンドンですら、まだ百万に達していなかった時代である。町人の人口はほぼ五十万で一定していた。巨大な官僚機構を支える武士が残りの大半を占めていたが、僧侶や神官の数も相当のもので、家族も入れれば十万に達した<sup>(5)</sup>。(和歌森太郎「結び」、『東京百年史』第三卷)

著者はさらにヨーロッパは近代都市のほとんどが独自に発達した商業都市で、君主の利害としばしば対立すらしたのに対して、江戸は人工的に国家権力によって作られた都市であり、世界的に特異な存在であったことを指摘している。そして、「武士の教養は非常に高かったが」、「好古的、学究的」であったため、「江戸の活力の源は、やはり下町にあった」<sup>(6)</sup>と指摘し、江戸の文化を下町に住まう町人及び文芸については、次のように評している。

日本橋をはじめとして、一般に下町は保守的である。もちろん、町人を

最下層に置く幕府の厳しい身分制度にたいして、不満はあった。この不満をぶつける手段として、下町の文芸や芝居には諷刺的性格が強く、山の手  
の武士階級を揶揄して溜飲をさげる気風もあったけれども、幕府体制の脅威となるほど強力な諷刺ではない<sup>(7)</sup>。(サイデンステッカー『東京下町山の手 1867-1923』)

周知の通り、幕藩体制維持のため、江戸幕府は儒教を官学化し、武士は厳しい規律の下で思想的自由を失っていたが、町人に対する規制は緩やかで、一定の諷刺表現は黙認されていた。また、浮世絵や川柳に見られるとおり、性愛に関する表現についても概ね寛容だった。こうした比較的自由的な環境が江戸文化を開花させたといえる。著者は「江戸の文化の精髓は歌舞伎と、そして遊里にあった」<sup>(8)</sup>とさえ断言している。現実的には歌舞伎も遊里も一般庶民には高嶺の花で、日常的娯楽は落語の寄席がせいぜいであつたろうが、守屋毅によれば、元禄期（17世紀末～18世紀初期）には「町民という名で、小市民ともいべき社会階層が成立し」、彼らが享受する「劇場や出版といったマス・メディアの成立が見られたこと」から、大衆文化が発達した<sup>(9)</sup>。岡本綺堂は「明治時代の寄席は各区内に四、五軒乃至六、七軒、大小あわせて百軒を越えていた」と述べており、江戸時代ほどでないとしても、明治期には多数の寄席があつたという<sup>(10)</sup>。周氏兄弟が東京で暮らした明治期には「江戸」と「東京」が混在していたことが看取できよう。

## 2、「下町」と「山手」

ここで簡単に周氏兄弟の日本留学時期の経歴を見ておこう。

【図1】 魯迅・周作人の日本留学期間<sup>(1)</sup>

年	明33 (1900)	明34 (1901)	明35 (1902)	明36 (1903)	明37 (1904)	明38 (1905)	明39 (1906)	明40 (1907)	明41 (1908)	明42 (1909)	明43 (1910)	明44 (1911)	明45/大1 (1912)
兄	江南鉱路学堂	弘文学院		仙台医専		独逸語専修学校			帰国				
弟	家居	江南水師学堂				法政		立教		帰国			

\* 明 = 明治の省略，明治45年は7月30日に大正元年に即日改元されている。

\*\* 在学期間は『魯迅年譜長編』第1巻（河南文芸出版社），『周作人年譜』（天津人民出版社 2000年）に準じている。

上図の通り，二人の留学期間は途中3年間ほど重なっている。その間に『域外小説集』など文学活動を展開したことは周知の通りだが，魯迅の留学期前期と周作人の留学後期の生活体験には大きな違いがある。魯迅は留学当初，弘文学院で日本語を2年弱の間，集中的に勉強してから仙台で医学を学んだ。魯迅の日本語能力は，留学期前期に正規学校教育で身につけたものである。その後，仙台医学専門学校（現東北大学医学部）を中退してからは，神田の独逸語専修学校に籍だけは置くものの，本郷で下宿しながら弟とともに文学活動に専念することになる。魯迅が接した東京というものは，弘文学院的所在地である牛込（現在の江戸川）と本郷で「山手」地域が中心であった。

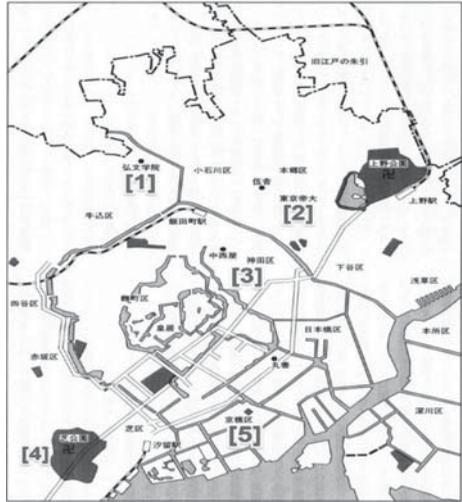
【図2】 周氏兄弟就学情况対照表

	【魯迅】（1881年出生）18～29歳	【周作人】（1885年出生）22～27歳
	1902年4月～1909年8月：7年	1906年8月～1911年秋：5年
学歴 (学校所在地)	1902年4月～04年8月：弘文学院（牛込） 1904年9月～06年3月：仙台医学専門学校 1906年4月～09年8月：独逸語専修学校（神田）	1906年9月～07年夏：中華留学生会館講習会（神田） 1907年夏天～08年7月：法政大学予科（麹町） 1908年7月～09年4月：(学歴なし) 1909年4月～11年4月：立教大学商科予科（築地）

二人が東京で生活していた時期を居住地で分類すると下記のようなになる。

- 1) 魯迅留学期前期：牛込区西五軒町：地図 [1]
- 2) 兄弟共同生活期：本郷区：地図 [2]
- 3) 周作人留学後期：麻布区森元町：地図 [4]

この三地点は現在の東京特別区内には含まれるが、「江戸」から「東京」になったばかりの当時の状況からすると、生活環境は大きく異なっていたと思われる。藤井省三著『魯迅事典』では当時の東京市（明治後期）の地図に江戸文政年間に定められた朱印図の境界線を加えることで、当時の東京市内の概念を示しているが、それによると、地図 [1] に位置する弘文学院は辛うじて江戸の朱印図の境界



【図3】 藤井省三『魯迅事典』（三省堂 2002年3月）  
P.12（地図上数字は著者による）

内にはいるものの、かなり辺鄙な場所であったことがわかる。東京帝国大学付近の本郷区（地図 [2]）は上野公園や神田も近く、生活も交通も便利だっただろうが、「山手」に属する。周作人が留学後期に住んだ麻布区（地図 [4]）にしても同様で、いずれも江戸時代は大名屋敷や寺社があった地域であった。

このなかで「下町」に属するのは、神田区 [3] と京橋区築地 [5] である。関東大震災前まで地価で最も高価だったのは銀座や有楽町ではなく、日本橋であった事実<sup>(12)</sup>が裏づけるように、かつては「下町」が日本経済の中心だった。その後の東京の変貌には中国人留学生も係わっている。明治初期、外国人居留地は築地（地図 [5]）、横浜に限定され、他の地域には居住できなかった。後に周作人が入学する立教大学もアメリカ人宣教師が開いた私塾が母体であったため、当時は築地で開校していた。このため本来「下町」だった築地も大きく変貌した。1899年に居留地の規制が撤廃されると、中国人留学生をはじめ、多くの外国人が神田に移り、下宿を兼ねた中華料理屋が軒を連ねる繁華街に変貌

し、地価は高騰した<sup>(13)</sup>。本稿では、このような都市の発展変貌のなかで周氏兄弟がどのように暮らし、日本文化を体験したのかを時期を追って検討したい。

#### 1) 魯迅留学前期：弘文学院：牛込区西五軒町

魯迅が弘文学院に入学する前後の経緯は、北岡正子『魯迅 日本という異文化のなかで——弘文学院入学から「退学」事件まで』（関西大学出版部2001年）の研究がもっとも詳しい。その研究と『魯迅年譜長編』（河南文芸出版社 2001年）に沿って事実関係を整理してみる。

1902年3月24日、魯迅は南京から上船し、上海を経由して4月4日に日本の横浜に到着すると、その日のうちに汽車で新橋停車場に着き、新橋からは馬車鉄道で三橋旅館に到着している。この三橋旅館は東京市麹町区平河町四丁目にあり、付近には中国語を教える善隣学院という私塾があった<sup>(14)</sup>。この旅館は現在存在しないが、かつては梁啓超、孫文らが戊戌の政変（1898年）で日本に亡命した際にも宿泊している。旅館の主、三橋常吉の経歴は明らかでないが、中国に対して相当の理解のあった人物のようだ。旅装を解いた魯迅は周作人宛の手紙に「彼の地の習俗として皆が地べたに直に座る」と記している。畳に座臥していたことを指しているのであろうが、中国人らしい感覚である。この時、魯迅が入学を予定していた成城学校は、陸軍士官学校入学希望者のための予備教育機関であった。しかし、魯迅は江南陸士学堂出身とはいえ、その附属学校の鉱務鉄道学堂で学んでいたので軍務を志望していたわけではなかった。そのために成城学校側から入学許可が下りず、紆余曲折を経て4月12日に弘文学院入学が決まり、4月末、周作人宛の書簡でその旨報告している<sup>(15)</sup>。

魯迅は附設の寄宿舎で暮らしながら、牛込区西五軒町（上図 [1]、現江戸川区西五軒町）で2年間を過ごした。弘文学院の校舎は、明治35年に山崎武兵衛（不動産業）<sup>(16)</sup>から購入した広壮な木造平屋建ての家屋をそのまま教室にしたもので、北側を神田川が流れ、周辺一帯は武家屋敷と寺社が並ぶ山手地域に位置

していた。西五軒町からほど近い飯田町（現在の飯田橋）は、明治28年に鉄道が開通し、明治39年には東京電気鉄道が運行する外濠線（後の東京市電）も開通していたので、交通は至便とはいえないまでも、時間に余裕があれば、繁華街の神田や日本橋に出ることは可能だっただろう。だが、弘文学院では毎週33時限授業が行われ、夕食6時、就寝10時など、厳格に生活規律も定められていた<sup>(17)</sup>。平日は授業で終日拘束され、寄宿舎ゆえに夜間の外出もままならず、日曜など休日以外は外出できない生活であったと想像される。この頃の魯迅の生活ぶりに触れた文章は余り残されていない。数少ない事件として記録されているのは、辮髪を切り落とし、その記念に写真を撮ったことや『浙江潮』（浙江同郷会発行）に「スパルタ魂」（第5期）、「ラジウムについて」（第8期）を発表したこと等が断片的に知られているに過ぎない<sup>(18)</sup>。当時の生活の様子を伝えるのは、ともに弘文学院に学んだ許寿裳であり、魯迅は当時から日本語書籍を既に多数購入し、和刻本の『離騷』さえ所蔵していたことを記している<sup>(19)</sup>。弘文学院での修業年限は通常3年間だったが、魯迅は「速成普通科」を2年で修了し、1904年9月より仙台医学専門学校に入学し、仙台へ赴いた。

## 2) 兄弟共同生活期：本郷区

1906年3月、魯迅は医学の道を断念すると、仙台から東京に戻り、本郷に住居を定め、神田の独逸語専修学校（現獨協学園）に学籍を置いた。

本郷もまた山手に属する地域だったが、東京帝国大学の近くで、学生と教員が多数居住しており、書店が蝟集する文教地区だった。魯迅が仙台から戻るのと同時に周作人も来日し、二人は下宿を転々としながらも当時「学者町」と呼ばれた本郷界隈から離れなかった。だが、1909年3月に周作人が羽太信子と結婚すると、経済的に余裕がなくなり、魯迅は家計を支えるために8月に帰国し、周作人夫婦も12月には家賃の安い麻布へと転居することになり、学者町と別れを告げた。この「学者町」という呼称は夏目漱石の随筆にも見える。

【図4】 周氏兄弟の本郷での下宿

年月	住所（備考）
1906年3月	本郷区湯島2丁目伏見館（仙台医専退学後に入居）
1907年3月	本郷区東竹町中越館（伏見館の隣人の喧噪を嫌って中越館に転居）
1908年4月	本郷区西片町伍舍（許寿裳らと共同生活。羽太信子が賄い婦として働く）
1909年2月	本郷区西片町（3月周作人結婚，8月魯迅帰国，12月麻布へ転居）

西片町は学者町か知らないが雅な家は無論の事、落ちついた土の色さえ見られないくらい近頃は住宅が多くなった。学者がそれだけ殖えたのか、あるいは学者がそれだけ不風流なのか、まだ研究して見ないから分らないが（以下略）。（夏目漱石「趣味の遺伝」1906年）<sup>(20)</sup>



【図5】『東京最新全圖（明治卅八年三月版）』（国土地図株式会社複製，刊年失記）太線で囲んだ箇所は下宿のおおよその所在地を示す

漱石はイギリス留学から帰国後、1903年から3年ほど本郷区千駄木（現文京区向丘）に住み、継いで本郷区西片町（現文京区西片）に移り住んでいるが、一年足らずで牛込区早稲田南町（現新宿区喜久井町）に移ってしまう。後1908年には、この西片の邸宅を魯迅ら留学生五人が借り受け、「伍舍」と名付けて住むことになる。当時ともに暮らした許寿裳は次のように回想している。

1908年の春、私は東京高等師範での学業を終えると、国文の補習のかた

わら章炳麟先生のもとで勉強し、ドイツ語も練習しつつヨーロッパ留学に備えていた。そこで良好な環境を手に入れようと、本郷西片町に豪壮な貸家を見つけたのだ。もとは日本人紳士のお屋敷だったが、持ち主が大阪に転居したため、貸してくれた。(中略)西片町は有名な学者街で、どの家も博士、碩学ばかりだった。私たちの家だけ学生五人で雑居していた<sup>(21)</sup>。  
(許寿裳『亡友魯迅印象記』)

明治末期の本郷界限には既に市電の駅もあり、商店も少なくなかったが、この記述からもうかがわれるように、東京帝国大学は前田家加賀藩の敷地であり、歴史的にも山手に属する地域であり、大学を取り囲むように発展した地域であるため、学生や学者たちが多い閑静な文教地区だった。『物価の文化史事典』によれば、日本橋や神田と比べ、家賃はかなり安く、神田の半分以下であったという<sup>(22)</sup>。

神田は本郷から近いけれども歴史的に下町として発展し、日本橋に次ぐ繁華街だった。さらに1899年には外国人に対する居住制限撤廃とともに中国人留学生が多数流入した。このため神田には賄い付き下宿屋として中華料理店が多数開業した<sup>(23)</sup>。周作人が「東京における魯迅(十九)酒」<sup>(24)</sup>で言及する中華料理店「維新號」は1899年に開店しており、その歴史を裏づける存在である。裕福な中国人留学生は神田にある中華料理の賄い付きの下宿屋を選んだが、周氏兄弟は生活上の不便を忍んでも、家賃の安い本郷の下宿を選んだ。周作人は東京での生活を振りかえって次のように述べている。

中国人学生は初めて日本に来て、日本料理を口にして、何ともあっさりして味気がなく、脂っ気もないのに驚き怒った。下宿や借家の料理はもつとひどく、気持ちはよく分かるが、私自身は苦にならず、まったく異なる趣を楽しんだ。わが故郷は貧しく、庶民は日に三度の食事をするのがせい

ぜいで、漬け物、臭豆腐、タニシだけが菜だから、塩辛くても臭くても平気だし、脂っ気が死ぬほど好きでもなく、日本で何を食べても問題なかった。(周作人「日本の衣食住」)<sup>(25)</sup>

さらに当時の神田界隈の様子を次のように述べる。

東京だけでも留学生の数は二万人を超え、そのほとんどは神田と早稲田に集中し、夜ごと神保町の表通りを見れば、街に行く留学生の頭にはおおかた「富士山」が結い上げられていた(「同上」)<sup>(26)</sup>

文中の「富士山」とは辮髪を巻き上げた髪型を指す。辮髪は清朝時代すべての中国人に強制された風俗だが、日本では不都合が多いので隠していたものである。魯迅は当時すでに漢民族の再興を誓い、清朝への隷属を示す辮髪を切り落としていた。魯迅は書店巡りをするたびに彼らを目にしたが、「出世や金儲けにうつつを抜かす者」<sup>(27)</sup>として軽蔑し、その種の手合いを避けて本郷で暮らした。

周氏兄弟が本郷で暮らした3年間は、自らの関心に沿った読書と執筆に費やされた。許寿裳らと語らって刊行を計画した雑誌『新生』は実現しなかったものの、魯迅は「摩羅詩力説」(『河南』第2、3号、1908年2、3月)、「文化偏至論」(『河南』第7期、1908年8月)を、周作人は「哀弦篇」(『河南』第9期、1908年12月)をそれぞれ発表しており、翻訳小説集『域外小説集』を1909年に刊行している。こうした論文執筆や翻訳のために、二人は日本橋の丸善書店(英仏独文洋書)、神田駿河台の中西書店(英文洋書)に足繁く通っていた。本郷界隈でも、南江堂(独文洋書)、相模屋(古本)、郁文堂(古本)、南陽堂(古本)等の書店に通っていた。

懐に何円かある時に良く行ったのは東京堂ではなくて中西屋で、丸善ならなお良かった。本が多いだけでなく、中西屋で小僧が常に付ききりで監視しているのに比べ、客への態度も良かった。林紆訳『説部叢書』を読んだ影響で、いわゆる弱小民族の文学に注意しつつ、その他に露仏両国の英訳版も網羅したかったが、毎月31円の留学費では本が買えず、おもちゃ屋に来て買えずにしょんぼりして帰る子供のようにだった<sup>(28)</sup>。(周作人「吾輩は猫である」1935年5月)

東京堂は日本語書籍をもっぱら売る書店で、当時の周氏兄弟は興味を持たず、英文か独文の洋書ばかり買っていた。周作人は支給される留学経費が足りないと不満をもらし、「国立大学に入学した者でも毎年500円がいいところで、高等学校は450円、他の学校は一律400円で、月あたり33円になり、本当にぎりぎりだった<sup>(29)</sup>」と語っているが、当時の日本の物価水準からいえば、明治末期の小学校教師の最低賃金が10円から13円であり、これと比べれば遥かに恵まれており、決して薄給とはいえない<sup>(30)</sup>。問題は彼らが買おうとしていた洋書が高価であったことに起因している。このため、二人は古書店で英文のスコットライブラリーや独文のレクラム文庫を熱心に買い集めた。本郷、神田一带の古書店には教師や学生たちが処分した洋書が多数流通しており、安価に買えた。兄弟は中国帰国後も丸善、相模屋など幾つもの書店から郵便で書籍を購入し、周作人は丸善が毎月発行する和洋書籍情報を掲載する『学燈』を定期購読するほど熱心だった。二人とも学校はほとんど通っておらず、魯迅も独逸語専修学校に籍を置いたにすぎないようだが、学校の選択にまったく意味が無かったわけでもなく、ある程度は通っていたようだ。周作人は次のよう述べている。

(仙台医専を：著者注) 退学後、東京に住んだ数年間ぶらぶらし、まともな学校にも入らず、「独逸語学協会」附設の学校に籍だけ置いて、気が

向いた時だけ授業を受け、ふだんは古本屋巡りばかりで、独文の洋書を買っては独りで読んでいたが、この三年間で外国文学の知識が十分得られ、その後の文芸活動の備えが出来たのだった。(周作人「魯迅の国学と西学」)<sup>(31)</sup>

この「独逸語学協会」とは、吉田隆英の研究によれば<sup>(32)</sup>、正式名称は「独逸学協会附属独逸語専修学校」で、校舎は神田区西小川町1丁目2番地(当時、現在の千代田区西神田)にあった。この附設学校は1901年に開校し、1930年に閉校となった。この学校の設置本体たる独逸学協会学校(現獨協学園)は旧制高等学校に入学する事前教育機関として知られ、その名の通り日本を代表するドイツ語教育機関で、同校教師の編著になる『独逸文法教科書』(大村仁太郎、山口小太郎、谷口秀太郎合著、独逸学協会出版部1894年)は多くの学校で採用されていた。魯迅もある程度まで学校の性格を承知していて、入学したと考えられる。同校で教壇に立った粕谷真洋は訳注書『ハイネ詩集』(南山堂書店1921年初版、1927年第四版)を出版しているが、魯迅は第四版を後年購入している。周作人も指摘するように、ハイネは例外的に魯迅が愛好したドイツ文学作家だったので、粕谷の授業も聴講した可能性はある<sup>(33)</sup>。

周作人は1906年夏に来日後、清国留学生会館での日本語講座を1年受講し、法政大学特別予科で1年学んでいる。留学生会館は1902年に竣工し、神田区駿河台鈴木町18号(現千代田区駿河台)にあり、本郷の下宿からも歩いて通える距離にあった。だが、「授業はあまり真面目に出たとは言えず、おおかた1週間に3、4回しか行かなかった」という<sup>(34)</sup>。続いて進学した法政大学も校舎は麴町区富士見町(現千代田区富士見)で本郷から遠くはなかったが、「事實上、通学したのは全体の数パーセントで、試験の段になって、学校から試験実施の通知をもらって受験にはせ参じたが、結局それでも2番という成績だった」<sup>(35)</sup>。特別予科は主として大学入学前に必要な一般教育を教授するため、江南水師学

堂に5年余り在学した周作人にとっては退屈であったことも一因であろうし、法政予科に在籍した1907年は魯迅とともに雑誌『新生』刊行の相談を始めた頃で、その準備や論文執筆に忙しかったためであろう。なお、当時の周作人の学籍について、法政大学史センターに問い合わせたが、大学令（大正7年）以前の学籍資料は現存していないとのことであった。

この時期の周氏兄弟の生活は、山手の文教地区で洋書を耽読する毎日であり、下町に残る江戸文化に接すること皆無に近かった。魯迅は本郷での生活を最後に中国に帰国するため、終生江戸文化を体験することはなかったが、周作人は羽太信子との結婚により、江戸文化と邂逅することになった。

### 3) 周作人留学後期：麻布区森元町

止庵は『周作人伝』（2009年）で「周作人は魯迅よりも2年遅れて日本を離れたが、日本に対する理解において兄との間に違いが生まれた。作人と日本の関係についていえば、この時期が実は重要である」と指摘している<sup>(36)</sup>。確かに周作人はこの2年間に大きな人生上の選択を行った。一つは生活のうえで羽太信子と結婚したこと、もう一つは学問のうえでギリシャ語の学習を始めたことである。この二つは決して無関係ではなく、作人の内面においては有機的連関がある。

羽太信子と結婚したのは1908年3月のことであった。信子は東京駒込の出身で、父親は染め物職人で、士族出身だった母親の実家に入り婿し、五人の子をもうけた。信子は長女で、家計が苦しかったために幼い頃から居酒屋で働き、ほとんど教育を受ける機会がなかった<sup>(37)</sup>。周作人と知り合ったのは許寿裳らと暮らした本郷の「伍舎」の頃に賄い婦として働いていた頃とみられる<sup>(38)</sup>。1908年7月に『域外小説集』を刊行した後、魯迅は日本から帰国して浙江両級師範学堂の教師となった。もともとはドイツ留学を夢見ていたが、「母親と何人かの者が自分に経済的な援助を望んだ」からであった<sup>(39)</sup>。兄魯迅と別れ、信子と

夫婦生活を始めた周作人は日本語の口語を勉強し直すことにした。

私は日本語を学んでもう何年にもなるのに、ずっと真面目に勉強してなくて、(中略)魯迅と一緒に暮らしていて、何か用があれば兄が片付けたので、私が話をする必要がなかった。(中略)その頃ほどなく魯迅は教師となるため杭州に赴き、私自身も結婚したので、それ以来、家庭内外の用事は自分で片付けねばならなくなり、勉強を迫られて、(以下略)<sup>(40)</sup>。(周作人「日本語を学ぶ(続)」)

結婚するまでは、周作人の主たる関心はロシア、東欧文学を中心としたヨーロッパ文芸思潮に向けられ、「東京での最初の2年間、日本語は学んでいたものの、ふだん読むのは英文ばかり」<sup>(41)</sup>という状況だった。実際、本郷と神田の書店街をめぐり歩き、翻訳作業をしているだけなら、生活上日本語はほとんど必要なかったはずだ。しかし、妻となる羽太信子は教育もなく、周作人の方が妻に歩み寄って理解する必要があった。

学ぶのは、書面の日本語ではなく、実社会で使う言葉だった。出来れば現代小説や戯曲を読みたいところだが、作品が多すぎて、どこから手をつけて良いか分からず、滑稽味のあるものだけを選んで読むことにした。それは文学では「狂言」と「滑稽本」で、韻文では川柳という短詩だった。(中略)このほかにも一種の笑話があり、「落語」と呼び、最後にオチ(原語:着落)があり、それは笑うところである<sup>(42)</sup>。(周作人「日本語を学ぶ(続)」)

書き言葉としての日本語ではなく、口語的な日本語を学ぶために選んだのは狂言や川柳、落語といった庶民芸能だった。自分の興味から選んだともいえよ

うが、日本人妻にとって最も親しみやすいものであったはずだ。そして、これらはすべて江戸文化の産物でもある。下町で生まれ育った信子なら貧しくとも寄席には通ったことがあったろう。実際、結婚したばかりの頃、二人は本郷西片町に住んでいて、「鈴木亭はその通りの果てにあり、私達がしょっちゅう通った寄席だった」と語るように、夫婦で帝国大学構内を抜け、不忍池をめぐる上野の寄席に通っていたと思われる<sup>(43)</sup>当時日本で撮影したとみられる写真が残されているが(図6)、和服姿の周作人が寄席にいても誰も外国人がいるとは思わなかっただろう。その違和感の欠如が日中間の文化的陥穽であると言わねばならないが、当の周作人自身、江戸の習俗に親近感を抱いていた。



【図6】 周作人と羽太信子（『周作人研究資料』上巻，天津人民出版社2014年）

私たちは日本にいます、半ば異国、半ば古代の感覚があり、その古代が寸分違わぬ姿で異国に息づいているので、それは夢幻の偽物でもなければ、朝鮮やベトナムの如き似て非なる礼装でもなかった<sup>(44)</sup>。(周作人「日本の衣食住」)

そのうえ周作人は当時すでに滅満興漢の態度表明として隷属の象徴たる辮髪を切り落としていたので、「清以前、あるいは元以前のものなら何でも良く、より古いものならなお良い」<sup>(45)</sup>という考えからすれば、唐代の遺風を残す和服はむしろ歓迎すべき習俗なのだった。留学後期に周作人が古典ギリシャ語を学ぶことを決意したのも、失われた漢民族の美風を日本に見いだす尚古主義的発想とある程度関係があり、そこには日本留学中に読んだH・エリス（Havelock

Ellis) の影響が介在している。

エリスは『断言』(Affirmation) で日本人とギリシャ人との類似性に言及し、「日本人は、別の時代、風土のもとに生まれたギリシャ人である」と指摘し、その理由として「(西洋人に教えられるまで) どちらも裸体をタブーとしなかった」からだと言明している。この指摘を周作人は「東京を懐かしむ」(1936年)、「日本の再認識」(1942年)などで繰り返し引用しており、ギリシャ文学への関心を深める契機になったと考えられる<sup>(46)</sup>。この関心は、アンドリュー・ラング(Andrew Lang) の文化人類学方面の著作からも刺激を受け、ギリシャ神話への関心と広がっていった<sup>(47)</sup>。こうした関心の広がりを背景として1908年7月に法政大学特別予科を卒業すると、半年後の1909年4月に周作人は立教大学予科に入学する。立教を選んだ理由を次のよう述べている。

伍舎で暮らした頃のこと、二つ特記すべきことがあって、第一は、その年(1908年：著者注)の秋に古典ギリシャ語を学びはじめたこと、第二は、章太炎先生からインドのウパニシャッド(梵文：著者注)を翻訳するように言われたことだが、遺憾ながら私の怠惰のせいで、こちらは実現しなかった。当時、日本の学校にはギリシャ語という科目がまだなく、帝国大学文科ではラファエル・フォン・ケーベル(Raphael von Koeber)が哲学を教えていて、ギリシャ語も開講していたようだが、この最高学府に私たちは入学できないので、いろいろ思案の挙げ句、仕方なく築地の立教大学に入学した<sup>(48)</sup>。(周作人「ギリシャ語を学ぶ」)

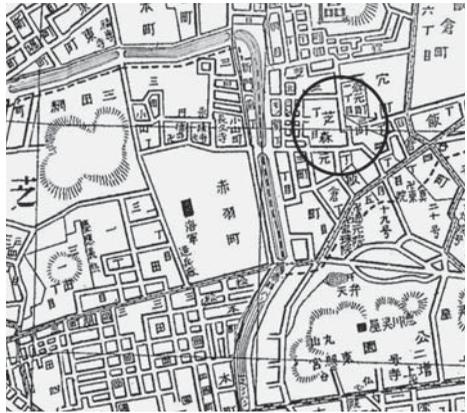
東京帝国大学に入学するには旧制高等学校を卒業するのが原則だが、周作人は大学予科を変則的に卒業しただけであるため、入学できなかったようだ。そのために私立の立教大学を選択した。

立教大学はアメリカ聖パウロ学校の宣教師によって設立され、1873年に当初

築地で開校し、1918年に池袋に移転した。従って、周作人は築地の立教大学に通っていた。江戸時代、築地は下町に属す地域だったが、明治期に外国人居留地として指定され、アメリカ大使館などの外国公館が築地に建てられたため、街並みも大きく変貌した。立教大学草創期の教員はほとんどがアメリカ人で、周作人が履修したギリシャ語の担当教員は大学学長だったヘンリー・タッカー（Henry St. George Tucker, 1874-1959）であった。授業も当然英語で行われたが、南京水師学堂でも英語で学んできた周作人にとっては特に困ることはなかっただろう。

根岸宗一郎<sup>(49)</sup>、波多野真矢<sup>(50)</sup>の研究によって、立教大学に残された学籍簿の調査が行われ、当時の学籍状況がほぼ明らかになっている（現在は大学方針の変更により閲覧できない）。それらによれば、周作人は1909年に大学商科予科に入学し、1911年4月に退学している。退学理由は「家事都合」と記されている。そして、波多野によれば、

成績簿に記録されているのは履修科目41科目中、ギリシャ語の成績だけで、その点数は98点であったという。なぜ当時商科を選択したのか理由は不明だが、根岸の調査によれば当時の大学学則から商科の学生であってもギリシャ語は履修可能であった。また、立教入学までに履歴上の空白期間があった理由について、根岸はギリシャ語を担当していたタッカーがこの時期日本に不在で授業も休講だったからではないかと推測しており、目下のところ学籍上の空白を説明するもっとも合理的説明である。1911年4月に退学したのは3月に魯迅から帰



【図7】『東京最新全圖（明治卅八年三月版）』（国土地図株式会社複製，刊年失記）太線で囲んだ箇所は借家のおおよその所在地を示す

国を促されたためと考えられるが、なかなか帰国しない周作人夫婦を説得するために魯迅が5月に再来日しており、周作人が中国に帰国したのは夏も終わり頃で、帰国に至るまでさらに紆余曲折があった。

立教大学入学後の1910年12月、本郷区から麻布区森元町（現港区芝森本町）に転居する。結婚後は周作人一人の留学費では足りず、兄からの仕送りがあったが、それでも生活に余裕はなく、転居は経済的な理由からであった。転居先は芝増上寺に近い山手だったが、永井荷風の『日和下駄』（1915年）では「芝赤羽根の海軍造兵廠の跡は現在何万坪という広い閑地になっている」とあるように、人気の少ない荒涼とした土地だった。周作人は本郷との違いを次のように述べている。

私たちはそれまで本郷区内にばかり住んでいて、ここは東京で「山手」と呼ばれ、（以下略）。西片町界隈はわけても有名で、知識階級が集中しているところだった。いま麻布に越してみると、「喬木」から「幽谷」へ移った（『孟子』滕文公上にみえる言葉。文化的程度の低い地へ移ることの喩え）とまでは言えぬが、要するに環境がまるで変わったのだ。麻布の家もかなり貧相で、玄関を開ければすぐ通りに面していて、なかは六畳一間の右手に三畳あり、裏には台所と便所があって、二階には三畳と六畳一間ずつあるが、家賃は安く、十円かそこらで、本郷の半分ぐらいだった<sup>(51)</sup>。（周作人「赤羽橋あたり」）

当時の麻布は市電が開通したばかりで、繁華街とはいえなかった。夫婦二人で暮らせる広さを求めたら、多少の不便は忍ばざるを得ず、立教大学のある築地は麻布から遠いわけでもなかった。近隣には借家が多く建ち並んでいたようで、その様子を振りかえって、「まるで三等車の乗客のように、何の分け隔てもなく、見かければ挨拶し、雑談を交わした」（「赤羽橋あたり」）<sup>(52)</sup>と述べてい

るように、本郷と異なり、「知識階級」の住むところではなく、雰囲気は下町に近かった。妻の羽太信子からすれば暮らしやすい環境だっただろう。ところが、引っ越して間もない1911年3月に周作人は兄から早く帰国するよう督促の手紙を受け取った。作人夫婦にしてみれば余りにも早い幕切れと感じられたに違いない。

### 3, 結びに代えて

兄から帰国督促の手紙を受け取った周作人の返信は現存しない。だが、弟からの返信を読んだ魯迅は親友の許寿裳に次のように嘆いている。

起孟（周作人の字：著者注）から手紙が来て、まだフランス語も少し勉強したいというので、私はフランス語など飯の種にならないから早々に帰国せよと返信するつもりでして、もし二年前にこんなことを言ったら、自らを責めたでしょうが、我ながら考えの豹変ぶりに憐れにも嘆かわしくなります<sup>(53)</sup>。（許寿裳宛1911年3月7日書簡）

同じ書簡のなかで、魯迅自身が帰国した後、残り少ない田畑も既に売却したので蓄えは既に尽きていると述べており、周作人夫婦の生活を支える経済的余裕は失われていた。それでも帰国を渋る弟を説得するため、魯迅は5月に自ら東京を訪れ、作人夫婦は夏の終わりに紹興へ帰ってきた。帰国間もない9月、次のような旧体詩を記している。

遠游不思帰 遠游して帰るを思わず  
 久客恋異郷 久しく客となり異郷に恋す  
 寂寂三田道 寂々たり三田の道  
 衰柳徒蒼黄 衰柳、徒いたずらに蒼黄たり

旧夢不可追 旧夢は追うべからざるも  
 但令心暗傷 但だ心を暗かに傷つけしむ<sup>(54)</sup>

(大意: 遠く日本に留学し、久しく暮らすうちに東京を好きになった。〔麻布の借家から通った〕三田の通りは今ごろ森閑とし、秋を迎えた路傍の柳の葉も枯れているだろう。いまさら昔の夢を追うことも叶わないが、ひそかな悲しみで心が痛むのだ)

本来なら生まれ故郷に帰った喜びに浸るはずが、逆に悲しみに沈んでいるとは東京での生活にどれほど愛着が強いかを物語るものであり、自ら第二の故郷と呼ぶ所以でもある<sup>(55)</sup>。この詩を記した1ヶ月後の10月末、時あたかも辛亥革命を目前にした時期に東京で書いた文章を整理し、その文章に次のように追記している。

東京に居ること六年、今夏、越に返り、故土に帰るといえども、<sup>いよいよ</sup> 寂寥益し、昔遊を追念し、時に<sup>とうしよく</sup> 槎觸するあり。宗邦を疏となし異地を親とする、<sup>あに</sup> 豈人情ならんか<sup>(56)</sup>。

この追記の意図するところも旧体詩と変わらないであろう。東京への愛着が強いあまりに祖国に疎遠を感じてしまうのは自らも情理に反することとじているのである。それでも捨てるには忍びないと浄書したのは、下町で釣りを楽しんだ休日を記した「写生文」であった。その冒頭だけでも引いてみよう。

庚戌(1910年: 著者注)の秋日、内人、内弟重久及び保板氏の<sup>とも</sup> 媪と偕に早く出で、尾久川に往き魚を釣る。蓬萊町を経て、駒込病院前を出でて、<sup>みち</sup> 途漸く寂靜たり、<sup>せま</sup> 隘けれど但し車を容れ、<sup>い</sup> 両旁は皆な樹木雑草にして、山嶺の間に在るがごとし。<sup>こみち</sup> 径尽き<sup>たちま</sup> 忽ち<sup>かつろう</sup> 豁朗にして、<sup>いつ</sup> 一に懸崖の上に出でれば、

即ち田端たり<sup>57)</sup>。

「尾久川」は正式名ではないが、江戸朱引図の北限が「尾久村」, 「尾久川」とされる。尾久村とは、現在の田端駅の北だから、川は付近の隅田川を指すようだ。東京帝国大学の西よりの本郷区蓬莱町（現文京区向丘）から伝染病患者を収容した駒込病院まで来ると人家も少なくなり、さらに田端まで来ると当時の感覚では鄙びた田舎で、妻信子の実家が付近にある。現在も駒込病院から動坂下までは下り坂だが、その先は緩やかな坂道を登り、田端駅（1896年開業）の前まで来ると、つづら折りの坂を登る。田端一帯はもともと武蔵野台地が荒川、隅田川の浸食を受けて形成された河岸段丘の上にあるため、確かに「山嶺の間」を行き、「懸崖」を越えた感覚がある。永井荷風が『日和下駄』で小石川一帯の「崖」を描写しているのを想起させる一節である<sup>58)</sup>。

このような文体で尾久までの釣行を描く文章は確かに抒情性豊かな「写生文」という名に値するだろう。後年留学時代を回想して、坂本四方太「夢の如し」の一節を写生文の一例として紹介し、自らの文も「写生文を模倣して書いた」（『俳諧』, 1961年）と述べている<sup>59)</sup>。周知の通り、写生文は俳諧の一分野として正岡子規が発展させたもので、子規が主宰する『ホトトギス』は留学中に兄弟二人が愛読した雑誌である。この『ホトトギス』に限らず、周氏兄弟が日本留学していた時期には新たな文学流派が多数登場している。周作人は当時の日本文壇について次のように回想している。

明治大正時代の日本文学は小説と随筆を幾らか読んだことがあり、今でも沢山の作品が好きで取り出して読むことがあるが、雑誌名で流派を示せば、おおよそ『ホトトギス』, 『スバル』, 『三田文学』, 『新思潮』, 『白樺』などで、みな敬服する作家ばかりだが、まだ存命の作家も多く、お名前を出すのは遠慮しておく<sup>60)</sup>。（周作人「私の雑学 十八外国語」1944年9月）

『ホトトギス』がやや早いですが、上記の雑誌名の多くが1910年前後に創刊されているのは興味深い符合である。それらを図表として整理してみると、以下のようになる。

【図8】 1910年を中心とする新たな文学流派の台頭  
(『新潮日本文学辞典』(増補改訂版) 1988年による)

『ホトトギス』	明治39年(1906)	俳句誌から文芸誌に変貌、漱石の『猫』(明治38年)、坂本四方太『夢の如し』(明治40年)などを掲載。
『スバル』	明治42年(1909)	発行名義人は石川啄木、森鷗外を指導者として仰ぐ。
『三田文学』	明治43年(1910)	永井荷風を教授に迎え、自然主義派『早稲田文学』に対抗
『新思潮』 (第2期)	明治43年(1910)	島崎藤村(顧問)、谷崎潤一郎、木村莊太など。耽美主義的傾向を持つ。
『白樺』	明治43年(1910)	武者小路実篤、有島武郎、志賀直哉など。理想主義を志向し、武者小路は夏目漱石に親近感を表明。

以上の通り、1909年、1910年に集中して創刊されており、そこで活躍した石川啄木、森鷗外、永井荷風、谷崎潤一郎、白樺派の作家など、みな周作人が生涯にわたって熱心に翻訳紹介した作家である。その意味で、この2年間で周作人にとっては極めて重要な意味を持ったといえるが、もう一方で兄魯迅は、1909年に一足先に帰国したため、日本の文学思潮受容の点では弟との間に思想的時差<sup>(61)</sup>が生まれた。以上の経緯を踏まえ、いま一度周作人の「写生文」に戻ろう。

この写生文のテキストは従来1961年に刊行された『知堂回想録』中の引用文としてしか読めなかった。オリジナルのテキストは生前未発表のまま、長らく周作人の書斎の筐底で眠っていたのである。そのため写生文に題名があることは知られていなかったが、2009年に『周作人散文全集』が刊行された際、遺族が提供した手稿が収録され、写生文には題名があることが判明した。この手稿は、帰国後に周作人が紹興で浄書したもので、帰国後作った旧体詩(上掲)、

追記も含まれている。その題名は“*Souvenir du Edo*”（「江戸の思い出」の意。フランス語としては *Souvenir d'Edo* が正しい）であった。題名をフランス語で記した理由について何ら説明はないが、兄から帰国を促された際に希望したフランス語学習とも無関係ではあるまい。そのフランス語学習の動機を、江戸と下町を愛し、その街並みに執着した作家と関連づけても牽強付会ではないだろう。後に「日本の最近三十年来の小説の発達」（1918年）で、周作人は次のように永井荷風を評している。

一つは享楽主義である。この派のなかでは永井荷風がもっとも有名である。彼はもともと純粋な自然主義派であったが、現代文明に対して深く不満を感じ、消極的な享楽主義へと転じた。（中略）谷崎潤一郎は東京大学出身で、荷風と同じ流派であるが、よりデカダンスの匂いを持っている<sup>62</sup>。

ここで周作人は永井荷風を享楽主義としているが、これは必ずしも否定的な評価ではない。武者小路実篤を代表とする白樺派とあわせ、目下の日本文壇を代表する流派で、いずれも自然主義に対抗する存在としている。文中、自然主義を定義するため、永井荷風『地獄の花』（1903年発表）の序文を引用し、「荷風はフランス文学に精通し、その主張はゾラの『実験小説論』から来ている」<sup>63</sup>と説明するように、作人の日本留学時期以前にも遡って荷風作品を網羅的に読んでいることがわかる。また、フランスより帰朝後の作品である『冷笑』から「現代文学への不満」を契機とする享楽主義への転向を読み取っているようだ。「写生文」で描かれる東京への愛着が『日和下駄』を想起させることは既に指摘したが、周作人は自らの資質に近いものを荷風を感じ取っていたと考えられる。

趙京華が「周作人の20世紀の30、40年代における思想と文章を見れば、日本の文学者・思想家でもっとも傾倒し、もっとも共鳴したのは永井荷風と谷崎潤

一郎の二人であることは疑いようのない事実である」と指摘するように<sup>(64)</sup>、周作人の永井荷風に対する傾倒は30年代になって顕在化するものの、両者の共鳴の源泉は留学後期の江戸文化体験にあると考えられる。(了)

- 注(1) 宮内庁『明治天皇紀』第一卷(吉川弘文館1968年)P.769  
 (2) 和歌森太郎「結び」(『東京百年史』第三卷, 東京都1972年)P.1489  
 (3) Edward George Seidensticker “*Low city, high city: Tokyo from Edo to the Earthquake*” (New York: Knopf, 1983.1<sup>st</sup>ed.) P.8, 邦訳はエドワード・G・サイデンステッカー『東京下町山の手1867-1923』(安西徹雄訳, TBSブリタニカ1986年)P.12による  
 (4) 「江戸朱印図」は『東京百年史』第一巻所収附録によった。  
 (5) Edward George Seidensticker “*Low city, high city: Tokyo from Edo to the Earthquake*” P.13, 邦訳はエドワード・G・サイデンステッカー『東京下町山の手1867-1923』P.18による  
 (6) Edward George Seidensticker “*Low city, high city: Tokyo from Edo to the Earthquake*” P.8, 邦訳はエドワード・G・サイデンステッカー『東京下町山の手1867-1923』P.12による  
 (7) Edward George Seidensticker “*Low city, high city: Tokyo from Edo to the Earthquake*” P.10, 邦訳はエドワード・G・サイデンステッカー『東京下町山の手1867-1923』P.14による  
 (8) Edward George Seidensticker “*Low city, high city: Tokyo from Edo to the Earthquake*” P.18, 邦訳はエドワード・G・サイデンステッカー『東京下町山の手1867-1923』P.22による  
 (9) 守屋毅『元禄文化 遊芸・悪所・芝居』「元禄文化史覚書——「あとがき」をかねて——」(講談社学術文庫2014年11月電子版)による  
 (10) 岡本綺堂「明治時代の寄席」(初出『日本及日本人』1936年1月号, 『綺堂芝居ばなし』旺社文庫1979年), 青空文庫2004年5月 ([http://www.aozora.gr.jp/cards/000082/files/42351\\_15659.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/000082/files/42351_15659.html))による  
 (11) 留学期間のズレを示すための概念図で正確ではなく、学校名も略称を用いた  
 (12) 森永卓郎編『物価の文化史事典』(展望社2008年7月)「家賃」の項目P.190-193  
 (13) 『東京人』2011年11月号「特集・チャイナタウン神田神保町」(都市出版)  
 (14) 『新撰東京名所図会』(第189号, 麹町区之部下1900年5月刊行, 睦書房影印本)P.138-139。  
 (15) 北岡正子『鲁迅 日本という異文化のなかで——弘文学院入学から「退学」事件まで』(関西大学出版部2001年)「一、鲁迅の弘文学院入学」並びに『鲁迅年譜長編』第1巻(河南文芸出版社2012年)P.76-78による  
 (16) 山崎武兵衛は広く不動産売買を行う資産家。「(神田区: 著者注) 猿楽町四路歴 先代武兵衛の長男にして弘化元年三月を以て生れ, 其名跡を襲ぐ方今土地建物合資会社代表社員たり」(『時事新報社第三回調査全国五拾万円以上資産家』(『時事新報』1916.5.27, 神戸大学附属図書館「新聞記事文庫」による)  
 (17) 北岡正子『鲁迅 日本という異文化のなかで——弘文学院入学から「退学」事件まで』P.298  
 (18) 『鲁迅年譜長編』第1巻P.87, 91, 95による  
 (19) 許寿裳『亡友鲁迅印象記』(人民文学出版社1977年)P.4  
 (20) 夏目漱石『趣味の遺伝』(『夏目漱石全集』第2巻, 岩波書店1994年)  
 (21) 許寿裳『亡友鲁迅印象記』P.26  
 (22) 森永卓郎編『物価の文化史事典』「家賃」の項P.194  
 (23) 『東京人』2011年11月号「特集・チャイナタウン神田神保町」(都市出版)



- 55) 「日本の衣食住」(『苦竹雜記』1935年6月), 『周作人散文全集』第6巻 P.657
- 56) *Souvenir du Edo* (1911年10月22日), 『周作人散文全集』第1巻 P.221
- 57) *Souvenir du Edo* (1911年10月22日), 『周作人散文全集』第1巻 P.220
- 58) 永井荷風「第九, 崖」『日和下駄』(1915年11月), 『永井荷風全集』第11巻(岩波書店2009年) P.169
- 59) 「89. 俳諧」(『知堂回想録』1961年4月2日), 『周作人散文全集』第13巻 P.410
- 60) 「我的雜学(十八) 外国語」(『苦口甘口』1944年9月), 『周作人散文全集』第9巻 P.234
- 61) 拙稿「周兄弟の思想的時差」(『アジア遊学』164, 勉誠出版2013年5月)
- 62) 「日本近三十年小説之發達」(1918年5月20日, 『芸術与生活』), 『周作人散文全集』P.53
- 63) 「日本近三十年小説之發達」(1918年5月20日, 『芸術与生活』), 『周作人散文全集』P.49
- 64) 趙京華「反俗, 伝統回帰と東洋人的悲哀」(『周氏兄弟与日本』, 人民文学出版社2011年7月) P.182

\* 本稿は中国文芸研究会夏季合宿(2014年9月1日)で発表した「周作人の日本留学時代について」(日本語)及び「2015紹興魯迅文化論壇暨“当代文化 語境中的魯迅”學術研討会」(2015年11月7日, 於:紹興咸亨酒店)で発表した「周氏兄弟与東京——兄弟之間的文化體驗差異」(中国語)を元に全面的に改稿したものである。口頭発表時に貴重なお批判, ご意見を寄せられた各位に謝意を表したい。

\* 本研究はJSPS 科研費26370416の助成を受けたものです。